

この「山本泰次郎小伝」2篇は、それぞれ無教会史研究会編著『無教会史Ⅱ第2期継承の時代』（新教出版社、1993年）及び同『Ⅲ第3期結集の時代』（同、1995年）の「独立伝道者」項に寄稿したもの。ただし、同項は1961年までで終結しているため、その後山本永眠（1979年）に至るまでの分を、「3.(補遺)」として付加した。

## 山本泰次郎小伝

### 1. 出生から昭和戦終結まで（1900～45年）

山本泰次郎は1900年9月に神奈川県片瀬に生まれた。内村の『聖書之研究』創刊の年であった。家は日蓮宗の信徒、叔父たちは有力なカトリック信者であったが、感化を受けることはなかった。1918年、東京高等工業学校（現東京工大）紡績科に入学。その第2年目の1920年1月25日、校内学生食堂の壁に貼ってあった「悩める者は来れ、内村鑑三師の聖書講演会へ」というビラを見て、ただひとり内村の大手町聖書研究会に出席した。そして「初めてキリスト教に接し、その日完全にそのとりことなる<sup>(1)</sup>」。

山本は内村講演会に行ったとき、もし今度この講演会で救われなければ、生きる望みはないとまで思い詰めていた。彼は物心ついて以来罪の意識に悩まされていた。この罪の苦悶から何とか解放されたいと願って、学生時代に社会主義思想に強くひかれ、友愛会に入会して労働運動に挺身しようとしたこともあった。その苦悶の絶頂において、山本は内村に出会ったのであった。その日の内村の話はダニエル書2章だったが、その内容は全くわからなかった。ただ「何とも形容しがたい感動に打たれ、これこそ自分が血を吐く思いで探し求めていた救いだ、この人こそ自分を救ってくれる唯一人の最後の先生だ<sup>(2)</sup>」と思った。のちに山本は、内村からその精神的苦悶こそ霊肉相剋の苦悶であり、内心分離の悲哀であること、そしてその苦悶のゆえにこそキリストの十字架があることを教えられて、安堵した。こうして内村は、この罪の問題に悩む青年に対して、深い同情と理解を注いでくれる唯一の恩人、贖罪の福音を教えてくれる唯一の恩師となったのである。

山本は入信後数年間は、ただひとりで黙々と内村の集会に出席していた。祈禱会などでも口を開くことはなく、もちろん内村の前へ出ることも怖くて出来なかった。しかしやがて、罪の赦しの福音は彼の全身全霊を満たすに至り、山本は喜びと平安の人となった。彼は内村を訪れ、心からの

感謝をもって、この新生の体験を報告した。1923年秋、関東大震災後のことであった。この時を境に彼は呪縛を解かれた人のようになり、青年たちの祈禱会に出席して、初めて人前で自分の信仰を表白した。

こうして山本は、柏木の青年会に加わり、塚本のギリシャ語聖書研究会にも真っ先に入会して、石原、鈴木（虎秋）、政池、鈴木（弼美）、湯沢、片山、牧野らと、実にめぐまれた交友を与えられた。また塚本からは、ギリシャ語とともに聖書学全般にわたって教えられた。1928年夏、内村の命により、斎藤宗次郎と共に会津白河街道に伝道した。伝道の意義と方法とについて多く疑問を抱いて帰ったという。1930年2月、内村の永眠にあい、「天涯の孤児となる。爾後なにびとも師事せず<sup>(3)</sup>」。

山本はキリスト教に接すると同時に、自分の生涯を伝道のために捧げねばならぬと本能的に直観し、そう覚悟したという。1921年、高等工業卒業と同時に石川県に奉職したが、翌22年には農商務省技官に転じた。彼は役人の生活になじめず、内村を訪ねて、その苦衷を訴えたこともあった。即刻辞表を出さんばかりの山本に対する内村の答えは、「でもネー、誰かがその仕事をやらなければならないんだからね」であった。

しかし、ついに決断すべき時が到来した。しかも意外に早く、内村の永眠の翌年のことであった。浜口内閣の金輸出解禁に伴って全国的に吹き荒れた官吏減俸反対運動に、山本はキリスト信者として、農商務省ではただ一人この運動に反対した。そしてこれこそ彼が、役人を辞めて伝道に立つべきことを命じられた摂理であると信じて、辞表を提出した。半年後の1932年1月、自由の身となった。この決意は親族はじめ上司、友人のすべてから反対されたが、ただ一人、その4年前内村の司式によって結婚した妻活子<sup>かつこ</sup>が、全面的に賛成してくれた。彼はこれに励まされて、独立伝道に身を投じたのであった。

伝道に立った山本には、二つの大きな問題があった。一つは生活問題である。恩給をもらえるようになってからにしてはどうかという親切な忠告も斥けて、伝道生活に入った彼の直面した現実は、実に惨澹たるものであった。病苦をはじめとする様々の苦難の中で、日ごとの糧に苦勞しながら、あらゆる節約を余儀なくされる生活が、ほとんど20年間続いた。上よりの恵みと助け、そして家族の理解と協力に感謝しつつ、彼は「漸くにしてどうやら明日のパンを案じないですむようになったのは、実に60歳を越えてからのことでした<sup>(4)</sup>」と述懐している。

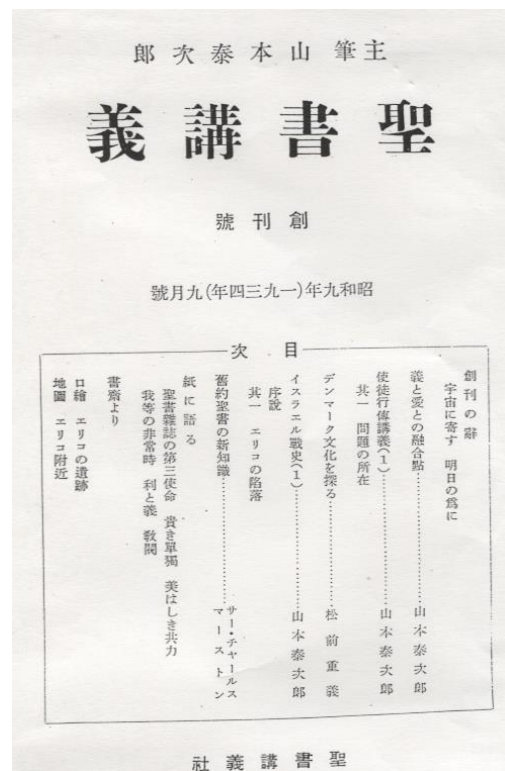
しかし独立伝道に当たっての、生活問題にまさる重大な問題は、いかなる伝道方法をとるかとい

うことである。彼は聖書やキリスト教、あるいは伝道について何一つ組織的に学んだことはなく、属すべき教会も教派も集団もなく、取り立てて主張し、伝えるべき教義も信条もなかった。また彼には内村鑑三や「無教会主義」を掲げて伝道しようという気も全くなかった。ただ山本には、何とでも伝えたい一つのものがあつた。それはキリストの十字架による贖罪の福音であつた。そしてそれを聖書によって明らかにするために、聖書を研究し、聖書を伝えたいと願つた。これが山本の伝道のすべてであり、伝道の方法のすべてであつた。彼はひそかに「聖書を国民の書に、国民を聖書の民に」というモットーをかかげて、「聖書伝道」を生涯の伝道目的としようと決意したのであつた。

伝道の手始めは『ダビデ伝』（聖書講義社、1934年）の著述、刊行であつた。山本は聖書を神の召された信仰の偉人たちの伝記集であると見て、ダビデに始まる列王伝、預言者列伝、使徒列伝を経てキリスト伝をもって終わる一大聖書列伝を計画し、これをもってその第一巻とした。この計画は実現しなかつたが、この処女作に示された彼の聖書研究の精神と方法とは、その後も少しも変わっていないと言ってよいだろう。ちなみに、当時ある著名な旧約学者が、これは出るのが50年早かつたと評したという、学問的労作でもある。本書上梓と同時に、1934年9月、山本は月刊誌『聖書講義』を創刊した。

創刊の目的は、その「創刊の辞」にあるように、「飢え渴くごとく義を慕う人々と共に、救いの福音を語らんがため」であつた。そして山本は、この雑誌の刊行をもって自分の伝道の全部としようと考へた。一般に伝道といへば、集会や教会を造つて人を集め、あるいは各地の信者を訪問して信仰を語り、信者を教え励ますというのが常識だが、彼はそのようなことは一切考へなかつた。彼の性格や健康がそれに適さないということもあつたろうが、彼は「日本の現状、特にキリスト教の現状に照らし、自分のような何らの組織にも集団にも属さない者にとっては、雑誌によって広く訴へるという方法以外に道がない<sup>(5)</sup>」と考へたからであつた。

『聖書講義』という誌名もまた、そうした彼の伝道観の端的な表明であつた。伝道とは神の言とキリストの教えとをそのままに、直接に伝えることである。そのためには、聖書そのものを明らかにし、また伝えることが唯一の道である。昔の儒者たちが漢籍を講義したように、聖書そのものを



講義することによって伝道しよう。これが『聖書講義』という名のゆえんである。パウロのいわゆる「他人の土台の上に建てる（伝道する）」ことを潔しとしなかった山本は、誰が買ってくれ、誰が読んでくれるか、何のあてもないままに、ひとりで雑誌を造り、ひとりでそれを世に送り出した。ただ神の言葉は「話すことなく、語ることなく、その声も聞こえないのに、その響きは全地にあまねく、世界のはてにまで及ぶ」（詩19篇）ことを信じて。そして以後45年間、病に倒れてその手からペンが落ちるまで、彼は日曜日の家庭聖書集会を除けば、一般に伝道と考えられるようなことはほとんどせずにこの『聖書講義』に拠って、ただひたすらに聖書を講義し、キリストの福音を語り伝えたのである。

大きな聖望を抱いての出発であった。しかし山本は、創刊号の発行と同時に、これは伝道雑誌として、何か大きな、大切なものを欠いているのではないか、という不安におそわれたという。案の定それは現実のこととなり、間もなく彼は結核に倒れ、療養を余儀なくされた。彼はこれを「聖書講義誌の編集方針を変更せよ」との神の命であると直感し、直ちに休刊した。1936年面目を一新して、より福音的、かつ伝道的な雑誌として復刊したが、この後も一再ならず、休刊、復刊を繰り返した。そしてついに、第60号をもってひとまず廃刊した。1942年12月のことであった。当時は戦時下で統制が厳しく、用紙入手難などのためもあったが、その真の原因は、むしろ主筆自身の信仰の不安定にあった、と彼は言う。

山本をおそった不安とは何であったか。一つには彼が「十字架の贖罪だけを信じる信者」に終わっていたことである。彼は贖罪の福音に対する渴望が余りにも強く、それによって救われた喜びが余りにも大きかったため、その他のことはほとんど念頭になかった。彼のキリストは十字架上のキリストで、その許にひれ伏してはいたが、主と仰いですが、内に迎えまつるキリストではなかった。別言すれば、彼はまだ聖霊の下賜に浴していなかった。彼は聖霊ぬきのキリスト教を信じる聖霊なき信者であった。そこに彼の霊の荒野があった。聖書雑誌を創刊して伝道を開始しながら、山本が一種言い難い不安におののいたゆえんであった。

もう一つの問題は、信仰の実践の問題、特に非戦論の問題であった。山本は信者になった当初から、山上の垂訓の教えに従って地の塩、世の光とならねばならぬと決意していた。カイパーの『カルビン主義』などの影響もあって、信仰告白・偶像礼拝拒否・禁酒禁煙などについては確信をもって実践していた。

しかし戦争に関連して、非戦論者・平和主義者としていかなる態度をとるべきか。時あたかも太

平洋戦争に突入する前夜のことであったから、これは実に切実な問題であった。非戦・平和主義を忠実に守り、これを実行しようとするれば、当然徴兵を拒否し、あるいは戦費となる税金の納入を拒否しなければならない。これは国法を侵し、国家社会の秩序を破ることになる。そのために投獄、処刑されることは恐れるものではないが、そのような態度をとることは果たして聖書的・福音的か。聖書と福音は人を激烈な平和主義者としてしまうが、同時にそれを忠実に実践することは許さない。これは実に大いなる矛盾であって、人を困惑、混乱に陥れるものである。この矛盾が解決されなければ、人は平和主義者としても、キリスト信者としても立つことはできない。これが山本の大問題であって、彼はひとり信仰の荒野にさまよわなければならなかった。

以上の二つの問題に苦しむ山本に、神は次の3冊の本を通して語られたという。W・L・ウォーカー『聖霊と受肉』、A・J・ゴードン『聖霊のはたらき』、R・ゾーム『教会史要』。山本によれば、ウォーカーは、復活のキリストは現在ただいま、聖霊としてわれわれと共にいて下さる、われわれはこのキリストと共に生きているのである、いな、この生けるキリストこそわれわれに他ならないのである、これが救いであり、聖書の福音の真髄である、と示してくれた。ゴードンは再臨の信仰を確かにしてくれた。さらにゾームの「この世界に勝つものは生けるキリストの福音の力であって、これにさからいうものはない。問題はキリストの生ける霊が各人の内に宿りたもうか否かである」という結論に励まされて、山本は、徐々にではあるが、次のように確信するに至った。キリスト信者にとっての最大の問題は、平和主義を唱えるか否かの問題ではなく、いかにしてキリストに生きるかという問題である。問題は非戦論や平和主義にあるのではなく、生けるキリストであり、その福音である。聖書はただこの一事を教えているのである、と。

日本の敗戦も間近い頃、山本は一家をあげて帯広へ疎開した。ガン手術後の妻と、性来病弱の子供を戦火から守るためであったが、それ以上に「この信仰の荒野を北海道の広野に移してそこに聖霊の降臨を待て、とのかすかなささやきを聞いたと信じた<sup>(6)</sup>」のがその動機であったという。北海道滞在は1945年5月から48年10月に至るわずか三年半であったが、この霊の荒野は、彼のそれまでの信仰の遍歴の恩恵的総括の場ともいうべきものであったことは間違いない。

神は北海道の大自然の中で彼に聖霊を豊かに注がれた。その聖霊は夜のうちに滴る露のように（ホセア14・4）、彼の心も霊をもうるおした。入信以来ほとんど25年、内村に別れてから15年にして山本は今や全く新しい人となった。聖霊の内在と天国の福音に生きる、平和と歓喜と希望の人となった。

山本の内に伝道の意欲がふつふつと湧き上がってきた。彼はなおしばし荒野にあるが、その目は

すでに伝道の沃地を見はるかしていた。日本敗戦の日、彼は語っている。「敗れたのは古い、古い日本です。新しい日本は今始まったのです。私共は道徳を以て世界を導き、宗教を以て人類を輝かす新日本を、この眼で見るまでは、死んでも死に切れません<sup>(7)</sup>」。

本稿は主として山本泰次郎の自伝的回想「思い出すことども」に依った。これは『キリスト教図書』1～15号（1975・6－78・1）に連載されたもので、『山本泰次郎聖書講義双書・追加2回想と追憶』（キリスト教図書出版社刊）に収録されている。

- (1) 「山本泰次郎略歴」（上記巻に収録）。
- (2) 「思い出すことども」32頁。
- (3) 「略歴」
- (4) 「思い出すことども」92頁。
- (5) 同上、98頁。
- (6) 同上、115頁。
- (7) 「ハガキ便り」第63信（1945年8月15日）（『双書・別巻4、信仰所感集上』収録）。

なお、この時期における山本の著作は、本文中に挙げたものを除いて、次の通りである。

『聖書問答 ピレモン書の話』（1937年）。

『聖書講義パンフレット』第1－7号（1939年）。

『信仰と人生 ヨブ記と伝道之書講解』（1942年）。

『ハガキ便り』第1－136信（1944－49年）。

（所載）無教会史研究会編著『無教会史Ⅱ第2期 継承の時代』（新教出版社、1993年）

## 2. 戦後、伝道の再出発（1945～61年）

疎開先の北海道帯広で日本の敗戦を迎えた山本（1900－79）は「1948年秋、信仰上得るところあり、伝道に専念すべく職を辞して帰京<sup>(1)</sup>」した。早速に着手した仕事は、二冊の『書簡による内村鑑三』の執筆であった。一つは「ベルあての書簡」、他は「宮部あての書簡」による

ものである。前者は戦時中すでにその構想をまとめて出版統制会に刊行を申請したが、敵国人あての手紙を内容とするものは不相当として許可されなかった。D・C・ベルは内村が米国留学中に出会った実業家で内村の20歳年長、宮部金吾は内村の札幌農学校における同級、同室の無二の親友である。彼は、内村がこの二人に40年あるいは50年にわたって書き送った各200通に及ぶ手紙を整理、翻訳し、これに注解・説明を施して、内村をして自らを語らしめる伝記としたのである。それぞれ1949年と52年に刊行された。

1950年1月『聖書講義』誌が復刊された。第61号であったが<sup>(2)</sup>、新生の彼にとって、これはむしろ新しい雑誌の創刊に等しく、「それ以後の『聖書講義』は、もはや想を練り、語を飾り、文を磨く必要はなくなり、ただ上より示される音ずれをそのままに綴ればよくなり、毎月、流れるように発行されるに至」った。<sup>(3)</sup>

日本伝道の方法について、「文書伝道、特に聖書を注解して提供するのが最善であり、唯一の道である<sup>(4)</sup>」と信じていた彼は、以後30年間、家族を中心とする日曜の集まり以外には、地方伝道はおろか講演さえもほとんどすることなく、ただひたすら一本のペンにその聖書研究と伝道生活のすべてを託した。この点で彼は、文書伝道者の多い無教会の中でも最も徹底していたと言えよう。

『聖書講義』誌の体裁は、ほぼ一貫して巻頭言、聖書講義、日誌の三部から成る。巻頭言は聖書研究が凝縮して成った信仰所感文で、神の義と福音の慰めを語る。末尾の「東京だより」と題する日誌は、広い視野と高い見識とをもって書かれた信仰的日常の記録であり、同時に、日本のみならず世界全体をも包含した文明評論でもある。真ん中に位置する聖書講義は、厳密な学問的研究に支えられながらも訓話的注釈の類ではなく、彼の信仰そのものの告白であった。

山本は『聖書講義』の発行をもって自分の伝道のすべてであるとし、それをもって自分の生活を維持すべきであると考えた。そのために、多くの不便と労苦にもかかわらず、友人たちの援助によったわずかの一時期を除き、これを一貫して孔版印刷と手作り製本で発行した。晩年病気で倒れるまでは、自ら鉄筆を振り聖書とその講義を一字一字刻んで、雑誌を造った。ひとえに、信仰と伝道と生活の独立を守るためであった。

内村の永眠に際して、彼は「今後は（聖書だけに頼って）内村先生の著書は一切手にしない<sup>(5)</sup>」と決意した。彼が内村の全集を開いたのは、内村永眠後25年、独り立って「内村鑑三永眠25周年記念講演会」を開催したときであった。彼は言う、

その時、わたしはようやくにして自分自身の信仰を固めることができ、ようやく恐れとためら

いなしに先生の全集を読み、そして初めて、それまでは矛盾だらけと見えた先生の全集が一卷の書となり、しかもわたし自身の書となりました。(6)

1955年5月2日から5日に至る四夜の講演において、彼は「35年間の苦闘のすべてを投入して(7)」、内村のキリスト教の真髓を解明しようとした(8)。この時の第三講演「内村鑑三と無教会主義(9)」において、山本はかねてからの塚本虎二の「無教会主義」に対する疑念を公にして、内村の無教会主義と、内村がその遺稿(10)において「私は『今日流行の無教会主義者』にあらず」と宣言した時の「無教会主義」とは全く異質のものであることを言明した。前者は内村が1901年以来自ら公然と唱えたもので、十字架の贖罪の信仰、すなわち「人の救われるはその行為によらず信仰によるとの信仰(10)」の帰結であり、「十字架が第一主義であって、無教会主義は第二または第三主義であった(10)」。これに対して「今日流行の無教会主義」は、内村永眠に先立つ3年ほど前から塚本によって創唱されたもので、「信じてさえおればよい」とする「信仰のみの信仰」である。分かりやすく甘美であるが、その行き着くところ、十字架の贖罪を無用としかねない恐るべき主義・信仰であるというのである。

その夜彼は、ほとんど30年にわたる深刻な懷疑と苦悩ののちによりやくにして達し得た結論を、非常な勇気と決断をもって語ったのであった。彼は恩師の信仰の真髓をその「神の忿怒と贖罪(11)」に、信仰生涯のあり方をその「イエスを仰ぎ望む(12)」に見ていた。そうした彼の信仰からすれば、内村の「十字架教(13)」が、単なる「無教会主義」として伝えられることに堪えられなかったのである。もちろん塚本を名指して批判した彼の無教会主義論は、無教会一般に物議をかもし、多々批判も受けた。(14)しかし、その当否は別としても、内村の信仰と塚本の信仰の相違を、人物の違いとか、あるいは社会問題に対する態度の違いとかということではなく、どこまでも十字架の贖罪の福音とその信仰に関わる根本問題として論じているのは、恐らく山本だけではなかろうか。

彼はこの無教会主義に対する立場を貫いて、個人的友情は別にして、終生「いわゆる無教会主義」を信奉する人々とほとんど交流することはなかった。彼は毎年開催される「内村記念講演会」にも一度も参加したことはなかった。彼のこうした生き方の全体が、無教会主義を否定するほどに無教会的であった。内村の言葉(15)で言えば、彼は終始形と戦い、ひたすら神に生きようとしたのであった。

こうして、聖書伝道以外には何もしなかった山本は、生涯の唯一の例外として、内村についての著述に心血を注ぐことになった。例外というより、それは彼の伝道の重要な一環であった。その最大の事業は、教文館の委嘱により、1960年から始めた『内村鑑三聖書注解・信仰著作・日記書



簡全集』全50巻の編集であろう。これは内村の全著作を項目別に分類し、さらにそれを体系的に配列して、内村の信仰と精神とを明快に再現した画期的な編集である。また内村の著作の書きかえを初めて採用し、総索引を付けたほかに、編集者自ら一巻毎に詳細な解説を書いて、内村の著作をキリスト教の本質という一点から解明している。それは集めれば、それだけで一巻の内村論になるものである。この全集刊行は66年初頭に終わったが、その後改めて編集された『英文著作全集』（全7巻）も合わせると、完結までに前後10年余を要したことになる。

北海道における激しい霊的苦闘の中で、非戦論問題に信仰的解決を与えられた山本は<sup>(16)</sup>、帰京して伝道を始めた後は、いかなる世俗の問題をも福音の一部として宣べるようなことはなく、いちずに聖書を講じ、キリストの福音を宣べ伝えた。あれほど苦悩した平和問題とでも、その例外ではなかった。1951年9月号の『聖書講義』誌に載った「平和運動について」<sup>(17)</sup>という問答体の一文の中で、彼はこう言っている。

キリストの十字架の福音以外のものは何一つ私の興味をひきません。十字架ぬきの平和などは根のない花よりもはかないものです。故に私は十字架だけを唱え、伝えます。平和は他のモットモット善いものと一緒に、自然にその福音の実となって結ばれるでしょう。……私共は主のみ十字架を負わせまつておくことは出来ません。故に私には平和運動に加わる興味も時間もありません。私はただ十字架のキリストを信じ、唱え、伝えます。そして主イエス・キリストと共に、霊魂と心の平和とを伝えます。

それでは、彼は世俗の問題に興味も関心もなかったのかということ、決してそうではない。その一例として憲法論を挙げよう。

山本は1961年8月号の『聖書講義』誌上に、「憲法書き直しの必要について」<sup>(18)</sup>という評論を発表した。その要旨は以下のようである。

わたしは現在の憲法を、あらためて、国民の意志により国民の手によって書き直す必要がある、と考える。この主張の根拠は、現行憲法が結局翻訳憲法であり、占領憲法であるということにある。そもそも憲法は国家と国民の大憲であって、国民生活の基本を規制するものである。そうであれば、自分の憲法を他人に書いてもらって平気である国民は、自由も独立も知らない卑屈な国民である。国民が真に第9条の理想に生きたいと思うならば、あらためて第9条を国民自身の手で書き上ぐべきである。その時にこそ、日本人は初めて平和国民となり、世界は日本人に心から尊敬を払うに至るだろう。

この憲法論議は、いわゆる「憲法改正論」と違うのみならず、憲法制定の経緯はどうあれその高貴な内容のゆえに神が日本国民に与えられたものとする、いわゆる「キリスト教的護憲論」とも全く異なる。

山本の憲法論はいわば「宗教的憲法論」であって、「現行憲法をその根底から否定する」徹底的改憲論である。憲法は、神が形を生むように、国民の宗教が凝って自ずと生れる国民の憲法でなければならない。日本の現行憲法は形であって神不在、よって国民の神（精神・思想）をもって、あらためて形（憲法）を書き直すべしとした憂国の憲法論なのである。

- (1) 「山本泰次郎略歴」（『山本泰次郎聖書講義双書』キリスト教図書出版社（以下『双書』と略す）刊行案内、1975年3月）。『双書』追加巻2、5頁。
- (2) 「山本泰次郎」『無教会史Ⅱ』（新教出版社、1993年）111頁。
- (3) 「思い出すことども」『キリスト教図書』第1—5号（キリスト教図書出版社、1975～78年）。『双書』追加巻2、24頁。
- (4) 『双書』発刊時のことば。
- (5) 「思い出すことども」『双書』同巻82頁。
- (6) 同上『双書』同巻83頁。
- (7) 同上『双書』同巻137頁。
- (8) この時の講演は『内村鑑三』（角川書店、1957年）として上梓された。のち改題されて『内村鑑三の根本問題』（教文館、1968年）。
- (9) 「思い出すことども」『双書』同巻139頁。
- (10) 『内村鑑三追悼文集』（岩波書店、1931年）、『信仰著作全集』第18巻131頁。
- (11) 『聖書之研究』1916年4月、『信仰著作全集』第12巻51頁。
- (12) 『聖書之研究』1915年7月、『信仰著作全集』第7巻90頁。
- (13) 「十字架教」『聖書の研究』1921年1月、『信仰著作全集』第15巻99頁。
- (14) 例えば、関根正雄編著『内村鑑三』（清水書院、1967年）189頁。
- (15) 「無教会主義について」『聖書之研究』1927年10月、『信仰著作全集』第18巻88頁。
- (16) 『無教会史Ⅱ』113頁。
- (17) 『双書』別巻4、303頁。
- (18) 同上 別巻3、380頁。

なお、この時期における山本の著作は、本文および注に挙げたものを除き、次の通りである。

『一基督信徒の死』 1951年。

『キリストははたして神であるか』 1951年。

『フルード・宗教改革の精神』 1951年。

『信仰三十年』 1952年。

『使徒行伝の研究』 1953年。

『内村鑑三・余はいかにしてキリスト信徒となりしか』（内村美代子共訳） 1954年。

『キリスト教はどのようにして始まったか』 1956年。

『ローマ書講義上・下』 1959年。

『内村鑑三・統一日一生』（武藤陽一共編） 1964年。

（所載）無教会史研究会編著『無教会史Ⅲ第3期結集の時代』（新教出版社、1995年）

### 3. 補遺（1961～79年）

山本は病に倒れて（1965年）からも、妻黎子の良き内助を得て摂生につとめ、なお十余年充実した伝道生涯を送り、1979年3月26日早暁、同じ病で永眠した。享年79歳。机上に愛用のペンを置いたままの、真理の働き人にふさわしい「イン・ハーネス」の死であった。

『聖書講義』誌は同年4月第405号をもって廃刊となった。その3月号に「平安の道」と題する巻頭言がある。以下の言葉で結ばれているが、山本の遺言と言ってよいだろう。

わたしはただこの信仰—わたしのうちに生きておられるキリストと共に生きる信仰によって、平安と歓喜の生涯を送って来た。そして日ごとに、天国で生ける主に親しく会いまつる日の希望を強められつつ、他には何の望むところもない喜びの日々を送りつつある。

わたしの救いは、十字架の贖罪の教義ではない。生けるキリストご自身である。今復活して、天上に神の右に座しつつ、わたしのうちに生き給い、既に死んで無となったわたしとなって下さったキリストである。

なお、この時期における山本の著作は、死後刊行のそれも含めて、次の通りである。

『内村鑑三聖書注解・信仰著作・日記書簡全集』全57巻 編集・解説、1960～73年。

『内村鑑三 信仰・生涯・友情』1966年。

『ガラテヤ書講義』1967年。

『ヨナ書の教え 聖書問答』1970年。

『脚注新約聖書1 マタイによる福音書』1970年。

『同2 マルコ』1972年。

『同3 ルカ』1973年

『山本泰次郎聖書講義双書』全17巻 武藤陽一編 1975～83年。

『内村鑑三とひとりの弟子 斎藤宗次郎あて書簡による』1981年。